Alan Shelston, *Brief Lives : Elizabeth Gaskell*

London: Hesperus Press, 2010. 101pp. £ 7.99.

ISBN:978-1-84391-921-6

多比羅眞理子

ギヤスケル生誕 200 年の記念すべき年 2010 年にアラン・シェルストン氏が *Brief Lives: Elizabeth Gaskell* を上梓された。氏は多くのギヤスケル作品や書簡集 *Further Letters of Elizabeth Gaskell* の編者としてだけでなく、英国ギヤスケル協会創立者の一人であり、現会長としてギヤスケル研究を導く第一人者である。待望の出版といえよう。

本書は著名な英国作家たちを紹介するというシリーズ化された中の一冊であり、何よりも 101 ページという比較的短い頁数内に、ギヤスケルの生涯と作品が分かりやすい表現で、かつ、端的に書かれていて大変理解しやすいものとなっている。そして本書が薄いソフトカバーの装丁である点も、携帯しやすい普及版としての役割を果たしている。

まず最初に気づくのは、ギヤスケルを第一章の結婚前までは Elizabeth と記しているが、第二章から Lily と記す。この名は結婚後、夫のウィリアムが彼女をそう呼び、また、彼女自身も手紙で自分のことをそう署名したので、本書では Lily と記すと氏は序で断っている。今までにギヤスケルの評伝を著した多くの研究者たちの中で、ギヤスケルを Lily と呼んだ人は私の記憶では存在しない。ここには、夫ウィリアムと同様にギヤスケルへ寄せるシェルストン氏の熱い愛情が伺え、従来のみセス・ギヤスケル、またはギヤスケルという呼称ではなく、Lily と呼ぶことが、より、ギヤスケル個人の内部奥深くに入り込めると信じたからであろう。ここに氏がこの著作によせる意気込みが感じられる。

第一章 *A Little Giddy Thoughtless Thing* では、母を亡くしたギヤスケルと、彼女を引き取った愛情豊かな伯母のラム夫人を含めたナッツフォードに住む母方の親戚との交流や、幼年期からの彼女の精神にユニテリアリズムが及ぼした影響が分析されている。ここでシェルストン氏は、ギヤスケル自身の女性観、教育観の源

泉がこの地ナッツフォードと、のちに教育を受けたバイアリー・スクールにあり、とりわけ *Cranford* の作品にそれらが色濃く投影されているという視点をとる。

第二章 *Marriage, Children and the Death of a Child* ではマンチェスターのユニテリアンの副牧師ウィリアム・ギヤスケルとの結婚、牧師夫人としての生活、8回にわたる妊娠と出産、そして長男ウィリアムの死が中心に語られる。

第三章は *Writing and Recognition* と題して1848年に出版した *Mary Barton* を中心に取り上げる。中でもギヤスケルは *Mary Barton* の中で労働者階級での女性の生き方、あり方を探求しているが、作品で語られる労働者たちの困窮ぶりこそ、ギヤスケル自身を含めたミドルクラスの人々が知るべき教訓であるとシェルストーン氏は強調する (37)。そして作家として成功したギヤスケルが徐々に確立しつつある自己の世界と、従来の家庭人との両立に葛藤する姿が詳細に語られる (46)。

第四章 *Family, Fame, Friends* では、1850年以降1857年の *The Life of Charlotte Brontë* の出版までに書かれた長編小説—*Ruth, Cranford, North and South*、さらに編集者としてのチャールズ・ディケンズとの軋轢を含めて、多くの文壇の人々との交流が書かれている。この章の後半でシェルストーン氏はフローレンス・ナイチンゲールと、知り合った当初は未婚だったシャーロット・ブロンテとの交友関係について多くのページを割いている。そしてギヤスケル自身が今まで自分の世界では全く知りえなかった二人の生活環境とそれぞれの道、彼女たちの孤高な姿、ひたむきさに心惹かれ、そしてギヤスケルがとりわけ関心を寄せたのは、結婚を目的とせずに生きる強い女性の姿を彼女たちに見出したことにあるとしている (65)。

第五章 *Rome, More Writing and the Final Project* は、ブロンテの伝記にまつわる様々な問題を夫に託してローマへの旅立ちで始まる。まず伝記に関わる紛争の原因を分析し、続けて *Cousin Phillis, Sylvia's Lovers*、また、ギヤスケルの急死で未完に終わった *Wives and Daughters*、加えて他の多くの短編のテーマが順を追って丁寧にとだられている。そしてギヤスケルが最後に計画したのは、自分自身の健康を含め、夫の、そして家族の平安を願って夫の引退後に住む家をハンプシャーに求めたことを挙げる。ギヤスケル自身、自分が長くは生きられないだろうとっており、健康がすぐれないにもかかわらず小説を書き、その原稿料で家族のため

に家を購入した決断を勇氣あるものとしてシェルストン氏は高く評価している(90)。

氏が序で Gaskell 自身の言葉を引用したように、本書は妻、母としての家庭人、また作家として、さらにはマンチェスターから離れ海外を旅する旅人、というように、彼女自身内部に潜む多くの自己 (Mes) の存在と、それら個々の自己のせめぎあい、葛藤の中にあつたギヤスケルの実像を、彼女の人生を追いながら探ろうとした様子が明確に伝わる評伝となっている。実際に、各章でかなりの部分が家庭人としてのギヤスケルの側面を前面に出して書き進められている。ここが最近のジェンダー、あるいはヴィクトリア朝社会の様々な社会様式、社会問題に焦点を当ててギヤスケルの生涯や作品を論ずる評伝や研究書とは大きく異なる点である。本書ではあくまでもギヤスケルを、ヴィクトリア時代の家族へ献身的に心を砕く女性としてとらえ、現実社会の諸問題や人間模様を彼女の生活というフィルターを通して様々な作品に投影しているとする。この姿勢が、ギヤスケルを Elizabeth ではなく Lily と書かせた大きな要因であつたのではないだろうか。最後にシェルストン氏はギヤスケルを「機知に富み、自分の意見をはっきりと述べ、人間的に慈悲深い思いやりある女性」という言葉でこの評伝を終えている(90)。

ギヤスケルの評伝というと、1993年に出版された J・ユーグロウの *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* が彼女の生涯を詳細にたどることができる文献として近年受け止められているが、本書は小冊子ながらギヤスケルの55年間の生涯と、*Cranford*を含めた7編の長編、ブロンテの伝記、さらには、数多くの短編など、ほとんど全作品に言及されており、今後ギヤスケルを研究しようとする人々へのよき指南書となることは間違いない。

ただ惜しまれるのは、一つに、索引がないこと、次に、引用文の数が21か所にとどまっていることである。この点については、シェルストン氏自ら、ギヤスケル自身の発言に関する引用文の出典については、多くが有名な言葉であり、ギヤスケルの研究者であれば、すぐにその出典を見つけることができるので省略したと序で断り書きをしている。おそらく、引用箇所を多くつけないという対応は、頁数の関係でこのシリーズすべてにおこなわれたのかもしれないが、これは一般読者、とりわけ、ギヤスケル研究の初心者にとっては不親切におもわれる。この

欠点を補う意味でも、巻末には出版年順の作品一覧、また、主要な研究書も記載されているが、しかし、全体的に引用箇所が少ないのは充実した内容の評伝だけに残念である。

最後に、一人のギヤスケルファンとして述べたい。表紙のカヴァーデザインはギヤスケルの最晩年の唯一現存する写真をイラスト化したものであろう。元となった写真は、作家として、一人の女性としても自信と風格が漂い、また、こちらをじっと見通すような強いまなざしが伝わってくるものである。しかしその写真とは異なり、本書の表紙に使用されたギヤスケルのイラストは、今まで、リッチモンドやサミュエル・ロレンスの美人画に見慣れた読者の眼には、親しみは伝わってくるが、決して美しくない。一人の老年期に入ろうとする女性のポートレートとしか映らず少々悲しい。できるなら、もう少し美しく書いてほしかったと思うのは無理な願いであつたらうか。

しかし、これはあくまでも主観的で些末的なものに過ぎず、本書の素晴らしさを損ねるものでは全くないことを強調しておきたい。

(実践女子大学非常勤講師)